

6 ^{ダウンス} 丘陵殺人事件

一頭の牛の側を過ぎ 掘っ立て小屋を過ぎ
豚小屋と牛小屋を過ぎ
風に唸る電線を張った
等間隔に立つ電柱を過ぎ

パブを過ぎ ^{こうぼ} 修理工場を過ぎ 5
民衆のアヘンを
いつでも打ち込む用意のある
注射針のような教会の尖塔を過ぎ

^{すがすが} 清々しいサセックスの朝
「危険な街角」通りを 10
バートとジェニファーは歩いていた
今日もまた

相変わらず蜘蛛の巣が
イバラに絡みつき ^{から}
雲雀は得意気にうたい 15
雌牛にもツノが生えていた

「ごらん 手が汗ばんでいる」とバートが言う
女は男の手の平に唇を当てる
谷間の農場を見下ろす小道を
二人は歩いていた 20

一陣の風が ^{ダウンス} 丘陵を吹き抜けて
古代遺跡たる日輪が出現し
今日もまた完璧な朝 ^{あした} が
始まっていた

しかし 不吉な前触れのように 25
夏の稲光が

男の胸の地平線上で音も無く踊った
チラと横目に

そばの女の顔を見る すると 心を隠せない男の青い目の中で
まるでアスピリンのように 30
女のあらゆる希望は溶けていった
嘘が育まれる

男の額にも 女は唇を当てた
「どこかに座ろう」と男が言う
「針エニシダの向こうのシダの茂み 35
そこをベッドに」

すがすが
清々しい陽気な朝
キイチゴの茂みの温もりが
磁石のように 暗闇から誘い出すのは
目覚めた蛇 40

一匹の蛇が ゆっくりと体をくねらせ
眠たげに 気だるげに
サセックスの草地の上を書いてゆく
SOS

ジェニファーは座ったまま 45
キノコに手が触れる
腐ったゴム玉のようなキノコ
柔らかくて肉太

悲鳴をあげて手を離し 色を見る
まるでハンセン病患者の肝臓 50
女はバートに寄りかかる 男に伝わる
震え

丘の向こうの夜明けの海が
岩場に砕けて ため息をつく
しかしまた 見て見ぬ振りをする無数の目と一緒に 55

楽しげに見つめる

バートを その男の空いた手がゆっくりと
コートからレーヨンストッキングを引き出し
素早く 慎重に巻きつける
女の首に

60

「ああ きっとこうなると分かっていたわ」
こう言ってジェニファーは
穏やかに だらしとなって 微笑み続けた
男が首を絞める間

雲ひとつ無い空のもと
波ひとつ無い海原が静かに横たわっている
そして シダの茂みをベッドに横たわっている
殺された女

65

(山中光義訳)